



特別講演

日時 平成 28 年 11 月 13 日 (日) 13:30 ~ 15:00
会場 第 1 会場 (大阪府立国際会議場 5 階メインホール)
司会 大阪府薬剤師会 理事 近藤直緒美



座長 大阪府薬剤師会 会長 藤垣哲彦

地域包括ケアシステムにおける薬剤師の役割 ～外科医が薬局に帰って見えてきたもの～

ファルメディコ株式会社 代表取締役社長 はざま けんじ
狭間 研至

【略歴】

- 昭和44年 大阪生まれ
- ファルメディコ株式会社 代表取締役社長
- 一般社団法人 日本在宅薬学会 理事長
- 医療法人嘉健会 思温病院 院長
- 熊本大学薬学部・熊本大学大学院薬学教育部 臨床教授

- 1995年 大阪大学医学部卒業
- 1996年 大阪府立病院(現 大阪府立急性期・総合医療センター) 消化器一般外科
- 1998年 宝塚市立病院 呼吸器外科
- 2000年 大阪大学大学院医学系研究科 臓器制御外科 博士課程
- 2004年 同 修了 (医学博士 受領) 後, ファルメディコ株式会社 設立
- 2012年 医療法人 思温会 理事
- 2015年 医療法人大鵬会千本病院 院長
- 2016年 医療法人嘉健会思温病院 院長(名称変更)

日
程

特別
記念
講演

特別
講演

プ
ロ
グ
ラ
ム

共
催
セ
ミ
ナ
ー

分
科
会

口
頭
発
表

ポ
ス
タ
ー
発
表



地域包括ケアシステムにおける薬剤師の役割 ～外科医が薬局に帰って見えてきたもの～

ファルメディコ株式会社 代表取締役社長 はざま けんじ 狭間 研至

高齢化と少子化が同時に進行する我が国で、国民皆保険制度を堅持しながら、世界最高長寿を維持することは、容易なことではない。ただ、人口動態と疾病構造がどのように変化しつつあるのかということを見ると、その解決に向けた糸口がないわけではないことに気がつく。

その1つがこれからの地域医療の「ことがら」のほとんどは、薬物治療であるということである。マスコミを販わす先端医療は、ニュースバリューとして確かに大きいですが、それらを実際に受ける人の割合は決して多いものではない。基本的に、医療行為の多くは薬物治療が占めているが、高齢化、慢性疾患へのシフト、医薬品の進歩もあいまって、その比率はますます上がっていくことが予想される。加えて、認知機能や嚥下機能の低下は、様々な服薬支援を必要とするし、肝機能・腎機能の低下は、処方内容の個別最適化を必要とするであろう。このように複雑化する薬物治療支援のニーズが飛躍的に拡大するなかで、それを支える医師や看護師数は増大しないのが我が国である。医療ニーズと医療提供体制のミスマッチを解決するために多職種連携は必須であるが、特に医療ニーズの多くが薬物治療の個別最適化であることを考えれば、薬剤師が果たす役割は、入院、外来、在宅に関わらずきわめて重要になるはずだ。

とはいえ、従来通りの処方箋調剤業務を機械的にこなす「モノ」と「情報」の専門家としての薬剤師であるならば、物流システムの改善や調剤業務の機械化、そしてインターネットの発達によってその存在価値は相対的に低下している。しかし、薬剤師が、薬を患者さんに渡すまでの仕事から、薬を服用した後の患者さんをチェックすることで前回処方の妥当性を薬学的に評価し、次の処方内容の適正化につなげるという医師との協働した薬物治療を行う仕事にシフトすることの意義はきわめて大きいと言えよう。

そんな中で、2013年に厚生労働省は「地域包括ケアシステム」という概念を呈示した。これは、高齢者の尊厳と自立の保持を目的に、住み慣れた場所で最期までその人らしく暮らせるような仕組みを、国を挙げて作っていくというもので、医療・介護を初めとする社会保障の様々な政策は「地域包括ケアシステム」に基づいて遂行される。では、この枠組みの中で薬剤師は何をするのか。私は、現在の業務の延長上に考えるのではなく、「地域包括ケアシステム」という来たるべき未来から逆算して考えるのが良いと思っている。

従来もそうであったが、地域包括ケアにおいては医療の「ことがら」のほとんどは薬物治療が占める。認知機能や嚥下機能の低下は、様々な服薬支援を必要とするし、肝機能・腎機能の低下は処方内容の個別最適化を必要とするはずだ。このように複雑化する薬物治療支援のニーズが飛躍的に拡大するなかで、それを支える医師や看護師数は増大しないのが我が国である。医療ニーズと医療提供体制のミスマッチを解決するために多職種連携は必須であるが、特に医療ニーズの多くが薬物治療の個別最適化であることを考えれば、薬剤師が果たす役割は、入院、外来、在宅に関わらずきわめて重要になるはずである。

とはいえ従来通りの処方箋調剤業務を機械的にこなす「モノ」と「情報」の専門家としての薬剤師であるならば、物流システムの改善や調剤業務の機械化、そしてインターネットの発達によってその存在価値は相対的に低下している。しかし、薬剤師が、薬を患者さんに渡すまでの仕事から、薬を服用した後の患者さんをチェックすることで前回処方の妥当性を薬学的に評価し、次の処方内容の適正化につなげるという医師との協働した薬物治療を行う仕事にシフトすることの意義はきわめて大きく、その息吹は少しずつ、全国で見え始めている。

本講演では、このような観点から、医師・薬局経営者としてのみならず、一般社団法人日本在宅薬学会で薬剤師生涯教育にも携わるものとし、今後求められる地域包括ケアシステムにおける地域医療インフラとしての薬局や薬剤師の役割について、皆様と一緒に考えてみたい。